

二藤拓人著『断片・断章を書く：フリードリヒ・シュレーゲルの文献学』

須藤，秀平
京都大学

<https://doi.org/10.15017/7348043>

出版情報：九州ドイツ文学．37，pp.79-81，2023-10-31．VEREIN FÜR GERMANISTIK-KYUSHU
バージョン：
権利関係：



二藤拓人著『断片・断章を書く ——フリードリヒ・シュレーゲルの文献学』

須 藤 秀 平

ドイツ初期ロマン派を代表する思想家、作家フリードリヒ・シュレーゲルにはどのようなイメージがあるだろうか。難解なアフォリズムをはじめとする非体系的哲学を繰り広げた挑発的論客、ヴァイマル古典主義に対抗し近代における新たな文芸運動を指揮した美的革命家、あるいは男女関係のスキャンダルにまみれたサロン界の貴公子といったところだろうか。本書はそうしたイメージに対し、おそらくこれまであまり示されたことのない新たなシュレーゲル像の提示を試みる。ただし、作家の生涯と思想といった伝統的方法によってではなく、1800年頃のヨーロッパの文化習慣と、それを背景としたシュレーゲルの読み・書きの実践に迫るという文化学的・メディア論的方法によって。

本書の最大の関心は、シュレーゲルが書いた言葉から理解される思想内容ではなく、彼が書く際に用いた方法から見えてくる考え方や態度に置かれている。もっと言えば、その書く方法というのも、読者への効果を意図した表現技法のことではない。対象となるのは、出版・印刷に回る前の手稿、すなわちシュレーゲルがあくまで自分のために残したメモや覚書を含む一連のテキストである。2015年に刊行された複写版作品集にいち早く依拠することで、本書はシュレーゲルの手稿における書字そのものに焦点を当てる。そしてそれにより、彼が自らの思想を言葉で表現する以前の思考過程を——もちろん仮説的にはあるが——明らかにするのである。こうして見えてくる新たな作家像とは、日々大量の資料を蒐集してはそれを捌く文献学者としてのシュレーゲルであり、活字メディアの興隆とともに現れた濫読の世代に属する一読者としてのシュレーゲルである。

本書の概説を示しつつ、順を追って説明しよう。何よりもまず、テーマは表題にもある通り「断片・断章 (Fragment)」である。だが、シュレーゲルにおける最重要概念の一つであるこの断片・断章に対し、本書は通常想定されるようなアプローチを取らない。通常、シュレーゲルあるいはドイツロマン派における断片・断章と言えば、雑誌『アテネウム』や『リュツェウム』に掲載されたアフォリズムがおそらく真っ先に思い出されよう。加えて美学や歴史哲学においては「断片性」、すなわち全体に対し欠如を伴った部分であるという特性が、かえって「未完成の」、それゆえ「開かれた」ものとして肯定的な意味を持つようになった経緯がある。こうした文脈から、ロマン派における断片・断章は、未完や永遠の生成といった観念を好んだ彼らが自分たちの思想を多面的で開かれたものとして表現するために用いた形式とみなされることが多い。これに対し本書が明らかにするのは、シュレーゲルにおいて断片・断章がそうした観念的な術語として用いられる場面は実は限定的であるという事実である。本書によれば、シュレーゲルは Fragment をはじめ、断片・断章

を表す言葉を多くはより即物的な語法で、すなわち古代史料の物質的狀態を表すものとして用いており、それが觀念性を帯びた術語や表現形式として確立するまでには相当の過程があった。二部構成を取る本書の第一部「断章形式の成立」で詳らかにされるのは、シュレーゲルの特殊な断章の概念や表現形式が成立するまでのそうした語法の変遷である。

第一章ではまず、断片・断章を表す語の意味編成に関する考察がなされる。このとき重要なのは、シュレーゲルに関してのみならず、1800年頃の一般的な語法が視野に収められるという点である。本書によれば、当時のドイツの文芸市場において Fragment という名称は一種のブームを形成していた。すなわち1750年から1806年までの時期には「～の断章」といった表題を持つ書籍が、それもアフォリズムとは異なる散文ジャンルで大量に普及していたのである。また雑誌メディアが興隆した同時期には、人々の「読書熱」に応えるべく、執筆途中の作品が作者の意思とは無関係に出版されたり、分量的制約から数回に分けて連載されたりするという出版上の慣習が生まれ、ここでも Fragment を筆頭に、暫定的で部分的な内容を示唆する語が頻繁に表題に用いられたのだった。要するに、当時 Fragment は読者公衆の興味を誘う記号として機能していたわけである。もっともそうした記号化が、知識人たちがそれまで古典研究の文脈で断片に与えてきた価値基準を土壌としており、単なる「流行りもの」とは区別されるものであったという点については、本書の論述を参照されたい。

こうした文化史的背景に目配りしてなされる丹念な分析・考察は、シュレーゲルおよびロマン派における断片・断章研究の再検討を促すことにつながっていく。それは断章のモチーフがシュレーゲル独自の思想や表現形式へと先鋭化する段階を扱った第二章において顕著である。ここでは彼の断章の構想が、当時のメディア的条件のもとに、すなわち著作物が印刷され広く普及するようになった時代状況の中で生まれたという見方が示される。このとき、文字によって書かれたテキストは作家の意識から切り離された対象物として「客体性」ないし「物理的堅固さ」を持つという、W-J・オングに代表されるメディア論的視座が導入されることにより、シュレーゲルにおける断章もまた意外にも「完結性」および「質的強度」を持つものとして構想されていたという解釈が提示される。こうしてシュレーゲルの断章観は、しばしば一括りにされるノヴァーリスのそれ——「萌芽」や「種子」の比喩で表現される、これから思考を育て上げる読者に対し開かれたもの——とは対照的なものとして浮かび上がることになる。

第三章でも、同時代の文化的背景として、文芸市場の成立と読書人口の増加という現象に由来する読書行為のあり方の変容に着目した考察が進められる。本章で興味深いのは、ゲーテをはじめとした旧来の知識人とシュレーゲルの差異として、新たな「文字の文化」に対する順応の度合いが挙げられることである。18世紀後半に、わずかな書物を繰り返し（しばしば声に出して）読むというそれまでの集中的な読書から大量の書物を通じてより多くの情報を得ようとする多読・濫読への移行が生じたとされる中で、ヘルダーやゲーテ、さらにはシュレーゲルの兄アウグストは、むしろ「死せる文字」に対し「生ける声」の方を擁護しようとした。これに対し、本書はシュレーゲルを「活字中心の世代」の最初の一人として位置付け、まさにその文化習慣を通じて彼が「断章的書記」の方法を生み出した

という仮説を検証していく。

このときシュレーゲルのテキストに即して示されるのは、彼が書字という「外的な拠り所」を通じて自らの着想を客体化し固定するという方法や、大量の資料を読みかつ同時に書くという「研究」的な書記の方法を自覚し、また重視していたということである。さらにはそうしたシュレーゲルの方法が「視ること」、すなわち視覚にもとづく対象物の把握を基盤としたものであることが——これまた仮說的にはあるが——示されることにより、彼のテキストに「言語の音声的な要素（口頭性）を脱中心化する観点」が含まれている可能性が論じられる。これらの論考は高度に専門的でありながら、シュレーゲルの専門家でない者にとっても大いに示唆に富むものである。

こうして見ていくと、シュレーゲルにおける断章の意義や、その成立過程に関する論述が本書の半分以上を占めており、表題にもある「断片・断章」をシュレーゲルが実際に「書く」という段階に関する考察は、第二部「文化技術としての断章の書記」を待って初めてなされるということになる。とはいえここまでの記述を見てもらえれば、そのことが決して批判すべき点にはならないことがわかってもらえるだろう。

そしてこの第二部は、シュレーゲルがアフォリズムをはじめとしたテキストを執筆した際の方法あるいは思考過程についてその手書き原稿を直接参照し分析したものであり、本書のハイライトと言える。その成果を簡単に紹介するなら、第二部の初章となる第四章では、シュレーゲルが原稿の欄外・余白をどのように用いていたのかが示される。本書によれば、シュレーゲルはB5判程度のノートに日々大量のメモを書きつけていたが、その際本文の横に意図的に余白を設けて二段構成とし、その余白に本文に対する注釈や対立意見を列挙していた。ここからは産出と同時に批判あるいは更新をおこなうというロマン主義的思考様式の実践を見て取ることができる。このように、余白に書く、もしくは他にも下線を引く（第五章）、あるいは省略記号を用いる（第六章）といった形で残された書記行為の痕跡を、図版も示しながら丁寧にたどることにより、本書はシュレーゲルの「断章の書記」の実態を実証的に明らかにするのである。

それにしても、本書で扱われるような、新たなメディアをめぐる新旧世代の対立は、現代のわれわれにとっても身近な問題である。また、様々なテキストを読み、着想のメモを書きつけては読み返し、それに誘発されてさらに書くといったシュレーゲルの書記行為は、文学研究者としてのわれわれの日常的な活動とよく似ている。本書は理路整然としたメディア論的研究という、一見すると熱い作家論とは異なるアプローチを取りながら、シュレーゲルの息づかいを感じさせる血の通った書物である、などと言うと情緒的に過ぎるだろうか。少なくとも私は、シュレーゲルがもし現代に生きていたら昨今のメディア的状况をどのように見るのか、彼と対話してみたい気持ちになった。

なお、法政大学出版局という、良書だが表紙はお洒落とは言えない（失礼！）書籍を数多く刊行してきた出版社から、審美的にも機能的にも優れた装丁を持つ本書を出版したことは、これまた（メディア論的に）大きな功績である、と最後に言い添えておく。

（法政大学出版局、2022年）